

質疑事項



○食品等の流通の合理化及び取引の適正化に  
関する法律及び卸売市場法の一部を改正する法律案  
(参考人に対する質疑)

■□≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡□■



藤木眞也君

自由民主党の藤木眞也です。

本日は、三名の参考人の皆さん、貴重な御意見を拝聴させていただきました。誠にありがとうございました。非常に十五分という短い質疑時間ですので、早速質問に入らせていただきます。

ここ最近、非常に農業資材が高騰する中で、私、全国区ですので、全国の農家の方と会話をしますけれども、やはり誰と会ってもまず価格転嫁を進めてくださいというお話がある中で今回の法案が出てきているということで、農業者にとっては非常に期待の高い、大きい法案だというふうに認識をしております。

ただ、この流通過程、これまでの歴史を考えてみても、やはり売手は高く売りたい、買手は安く買いたいというのがもう常識の話であります。ここに手を加えていこうということで非常にこれ難しいなというふうに私は考えております。

今回、この関係者の理解醸成というところについて三名の参考人の方にお伺いをしたいのですが、今回の提案されている仕組みについて実効性が伴うかどうかは、生産者は生産コストをきちっと考慮してもらい再生産可能な価格を実現したい、また消費者は今までどおりできるだけ安く購入したい、小売業者は消費者に買ってもらえなくなるからなるべく安く売りたい、こうした生産サイドと消費、小売サイドとのせめぎ合いが生じる中で、いかにコスト指標を考慮した取引を実現させるかが一番の課題だと考えております。

言い換えれば、小売業者がコスト指標を考慮した取引に理解を示して価格設定ができるか、また、消費者がコスト指標を考慮した価格を理解して消費行動ができるかがシンプルに一番の課題だと考えております。

関連する内容として、法案の中には事業者等の努力義務として、商慣習の見直し等の持続的な供給に資する取組の提案があった場合、検討、協力することが明示されております。

ここで参考人の皆さんに質問ですが、先ほど井村参考人もこのことに触れ

ていらっしやいしましたが、この価格でなければ取引を打ち切るといったこれまでの商慣習が本当に是正されていくのだろうかというふうにお考えでしょうか。また、小売業者がコスト指標を考慮した取引に理解をしていくためにどのようなお考えをお持ちか、それぞれ順番にお聞かせいただければと思います。

○参考人（井村辰二郎君（日本農業法人協会副会長））

御質問ありがとうございます。

私は適正な価格形成に関する協議会で今まで議論を深めてきたんですけれども、そこには消費者の代表の方、流通の代表の方、様々なステークホルダーが集まりまして建設的な議論がなされてきたと思っております。その中で、本当に生産者としてその議論の中で感じたこととしては、皆さん、やはり日本の農業がなくなるということに対してはやはり危惧なさっていて、やはり日本の農業は必要だということを含めて、やっぱり農業者は持続可能なやはり価格で販売しなきゃいけないよねと、本当に温かいといいますか、本当、元気付けられる言葉たくさんいただいております。

そういった経験から、これから法律の運用ということで議論が入っていくと思うんですけれども、川上から川下までの関係者みんなが協調しながら、この法律を実効性のあるものにしていくという方向に行けるんじゃないかというふうに期待しているところであります。

○参考人（坂爪浩史君（北海道大学大学院農学研究員教授））

私は、今、先ほど報告の中でも申し上げましたけれども、令和の米騒動で米の価格というのは高くても買ってしまうということ、これは行動変容だと思うんですけれども、私も、札幌で全く米がなくなったときに、たまたまスーパー行ったら米が売っていたんで五キロ買ってきましたら、三千八百円だったんですけど、最初怒られました。何でこんな高い米買ってきたんだって言うけど、いや、私も値段よく知らないしと思って、怒られたんですけど。それは、だけど、今や三千八百円というのはそんなに高くないという。

結局、そのスーパーも、これ以上の値段になる、つまり値頃感を超えると売上げが落ちるということを各社みんなが分かっているで上げられなかったという、すくんでいる状態だったんですけど、これ、なくなりそうだったときに幾らでもいいから米が欲しいというふうには日本国民はみんな思うんだということだったと思うんですよね。ですから、米と米以外というのは若干違うかもしれませんが、少なくとも米についてはもう新しい価格体系に向かって動いているんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと回答になっていないかもしれませんが、以上です。

○参考人（新山陽子君（京都大学名誉教授））

そうですね、済みません、ちょっとそのところまでまだ答えができない

状態です。小売業者の方に、コストを反映した価格で消費者に買ってもらわないと生産者が続いていかないということを認識してもらわないとそれができないと思いますので、どうやって認識してもらおうかなと思います。



藤木眞也君

ありがとうございます。お米の場合、坂爪参考人が余り消費が落ちずにうまくいっているよというお話でしたが、私、和牛の生産者なんですけれども、和牛肉に関してはこの二年間ほど、非常にこの価格が上がったことによって、やはり今の経済と若干このギャップがあることによって消費が減退をしています。やはり一定の価格、ここまでなんだという限界は恐らくあるのかなということは若干考えながら、今後やはりいろいろな品目にこの枠は広げていくべきだなというふうには受け止めております。

あと一つ、これ私、非常に今後どう扱っていくのかなというのが運賃です。これ、私は九州ですし、橋爪参考人は北海道ですけど、やはりこの食料基地というのがどちらかという消費地から遠いところにあるということであって、それは近いところは当然運賃安いんですけれども、遠いところになればなるほど運賃が掛かってくると。これ当たり前のことなんですけれども、これをどうこのコスト指標の中で反映させるとうまくいくのかなということところが、なかなか私どもとしても考え方をあぐねているところがございます。このコスト指標を作成する上で、この運賃の取扱いということのをどのように三名の参考人の方はお考えなのかということをお聞かせいただければと思います。

#### ○参考人（井村辰二郎君（日本農業法人協会副会長））

まさに運賃等についてもこれから議論がなされて、どのような指数にしていくのかということ議論していくということだと思っておりますけれども、私の認識では、やはり地産地消といいますか、なるべく適地適作で、近くで消費してもらう、これは農業者としての希望であります。

ただ、産地と消費地というのがやっぱり離れていますので、ある程度たくさん作れる産地は消費地に運賃を掛けて届けなければいけない。でも、そのバランスも含めて自分たちの産地で何を作るべきか、これが適地適作だと思いますので、極端な話、ある程度のロットをそろえて、そこでしか取れないものであるから運賃を掛けても消費地に送ることができるという産地はそういったものを作ればいいと思いますし。

ですから、今まで、例えばお米に関しては日本全国で作っていたんですけれども、今後は適地適作のような、生産者もそういったものをデザインしていくというか、そういったこともこの指標によって自分たちがすべきこと、何を作っていくかなければいけないのかということを選択できていけるんじゃないかということで、前向きに捉えております。

○参考人（坂爪浩史君（北海道大学大学院農学研究員教授））

私は基本、青果物の方の研究しておりますけれども、青果物の場合には、卸売市場の卸売業者が日々直観的に産地の生産コストと輸送コストと判断して毎日の価格形成をしているというふうに私は思っています。確かに今、量販店の力が強いので、不公正な取引だとか買ったときとかという問題はありますけれども、でも、スーパーに聞いても、あるいは実勢見ても、マクロ的な需給関係に基づく相場の高騰とか下落というのをならずほどのバイイングパワーがあるかということ、僕はないというふうに思っています。

この冬の野菜の値上がりも、その不公正な取引で値段が下がっていたということでは、今だって不公正な取引なんてずっと続いているわけですから。まあこれちょっと言っちゃいけないんですけど。上がらなかったはずですけど、上がりましたよね。ですから、そういう意味では、青果に関して言えば、現行の卸売市場流通でも十分コストに見合った価格形成というのはされていると思います。

繰り返して言いますけれども、相場が下落したときに農家はその作物を生産をやめないための下支えというのは、適正価格を市場で強制することじゃなくて、私は、理想でいえば、保険だとか国の財政的な支援でそこをフォローするというのが私の理想だと思っています。ちょっと回答言い過ぎましたけど、以上です。

○参考人（新山陽子君（京都大学名誉教授））

そうですね、運賃をどう扱うか、難しいですね。日本の場合、だから、品目によってどこで生産されているかが違いますから、どれぐらい運賃が掛かるかも品目によってすごく違うし、季節によっても違いますしね。だから、それはもうちょっと議論した方がいいのかも分からないと思いますね。

それと、今、農水省で作られている資料を見ると、特定のルートを決めて、そこで調査をしているようですね。どの辺りで生産して、どういう経路をたどって、どこで出荷されているかというふうな。だから、それを一般化していいのかわかりませんが、まずはそういうのを積み重ねて、その差を把握して、どう対処するかを考えるということが必要なのかなと思います。



藤木真也君

少し時間残しましたけれども、もう聞いたらオーバーすると思いますので、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。

以上